

しゆしようぎ だいよんしょう ほつがんりしよう
修証義 第四章 発願利生

菩提心を発すといふは、己れ未だ度らざる
ほ だいしん おこ おの いま わた

前に一切衆生を度さんと発願し営むなり、
さき いっさいしゆじよう わた ほつがん いとな

設い在家にもあれ、設い出家にもあれ、或
たと ざいけ たと しゅつけ あるい

は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦に
てんじよう あるい にんげん く

ありといふとも樂にありといふとも、早く自
らく はや じ

未得度先度他の心を発すべし。其形陋し
みとくどせんどう た ころ おこ そのかたちや

といふとも、此心を発せば、己に一切衆生
このころ おこ オデ いっさいしゆじよう

の導師なり、設い七歳の女流なりとも即ち
どうし たと しちさい によりゆう すなわ

四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女
ししゆ どうし しゆじよう じ ふ なんによ

を論ずること勿れ、此れ仏道極妙の法則
ろん なか こ ぶつどうごくみよう ほうそく

なり、若し菩提心を発して後、六趣四生
も ほ だいしん おこ のち ろくしゆ ししよう

に輪転すと雖も、其輪転の因縁皆菩提の
りんでん いえど そのりんでん いんねんみな ほ だい

行願ぎようがんとなるなり、然しかあれば従来じゅうらいの光陰こういんは

設たとい空むなしく過すごすといふとも、今生こんじようの未いまだ過すぎ

ざる際あいだに急いそぎて発願ほつがんすべし、設たとい仏ほとけに成な

るべき功徳くどくじゆく熟えんまんして円満えんまんすべしといふとも、尚な

お廻めぐらして衆生しゆじようの成仏じようぶつ得道とくどうに回向えこうするな

り、或あるいは無量劫むりようごう行おこないて衆生しゆじようを先さきに度わたして

自みずからは終ついに仏ほとけに成ならず、但ただし衆生しゆじようを度わた

し衆生しゆじようを利益りやくするもあり。衆生しゆじようを利益りやくす

というは四枚しまいの般若はんにかあり、一者ひとつ布施ふせ、二

者ふたつ愛語あいご、三者みつ利行りぎよう、四者よつ同事どうじ、是これ即すなわ

ち薩埵さつたの行願ぎようがんなり、其その布施ふせというは貪むせぼらざ

るなり、我物わがものに非あらざれども布施ふせを障さえざる

道理どうりあり、其物そのものの軽かるきを嫌きらわず、其功そのこうの

實じつなるべきなり、然しかあれば即すなわち一句いっく一偈いちげの

法ほうをも布施ふせすべし、此し生しょう佗た生しょうの善ぜん種しゆとなる、

一いっ錢せん一いっ草そうの財たからをも布施ふせすべし、此し世せ佗た世せ

の善ぜん根こんを兆きざす、法ほうも財たからなるべし、財たからも法ほうな

るべし、但ただ彼かれが報ほう謝しゃを貪むさぼらず自みからが力ちからを

頒わかつなり、舟ふねを置おき橋はしを渡わたすも布施ふせの檀だん

度どなり、治ち生しょう産さん業ぎよう固もとより布施ふせに非あらざるこ

と無なし。愛あい語ごというは、衆しゆ生じようを見みるに、先ま

ず慈じ愛あいの心こころを発おこし、顧こ愛あいの言ごん語ごを施ほごすな

り、慈じ念ねん衆しゆ生じよう猶なほ如ごと赤あか子この懐おもいを貯たくわえて言ごん

語ごするは愛あい語ごなり、徳とくあるは讚ほむべし、徳とく

なきは憐あわれむべし、怨おん敵てきを降ごう伏ぶくし、君くん子しを

和わ睦ぼくならしむること愛あい語ごを根こん本ぼんとするなり、

面むかいて愛語あいごを聞きくは面おもてを喜よろこばしめ、心こころを

楽たのしくす、面むかわずして愛語あいごを聞きくは肝きもに

めい たましい めい あいご よ かにてん ちから

銘めいじ魂たましいに銘めいず、愛語あいご能よく廻かいてん天ちからの力ちからあるこ

がく りぎよう

とを学がくすべきなり、利行りぎようというは貴賤きせんの衆しゆ

じよう お りやく ぜんぎよう めぐ

生きに於おきて利益りやくの善巧ぜんぎようを廻めぐらすなり、窮きゆう

き みびようじやく み かれ ほうしや もと

亀きを見病雀みびようじやくを見みしとき、彼かれが報謝ほうしやを求もとめ

ただひとえ りぎよう もよお

ず、唯単ただひとえに利行りぎように催もよおさるるなり、愚人ぐにんおも謂も

りた さき みず り はぶか

わくは利他りたを先さきとせば自みずからが利省りれぬべ

しか あら りぎよう いっぼう

しと、爾しかには非あらざるなり。利行りぎようは一法いっぼうなり、

あまね じ た り どうじ

普あまねく自他じ たを利りするなり。同事どうじというは不ふ

い じ ぶ い た ぶ い

違いなり、自じにも不違ぶいなり、他たも不違ぶいなり、

たと じんげん によらい じんげん どう ごと

譬たとえば人間じんげんの如来によらいは人間じんげんに同どうぜるが如ごとし、

た じ どう のち じ た

他たをして自じに同どうぜしめて後のちに自じをして他たに

同どうぜしむる道理どうりあるべし、自じ他たは時ときに随したがう
 て無窮むきゆうなり、海うみの水みずを辞じせざるは同事どうじなり。
 このゆえよみずあつまうみ
 是故このゆえに能く水聚りて海うみとなるなり。大凡おおよそ
 菩提心ぼだいしんの行願ぎょうがんには是かくの如ごとく道理静どうりしずかに
 思惟しゆいすべし、卒爾そつじにすること勿なかれ、济度さいど攝
 受じゆに一切衆生いっさいしじゆじよう皆化みなけを被こうぶらん功德くどくを礼らい
 拜はい恭敬くぎようすべし。

年 月 日

氏名

謹写